

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18530612

研究課題名（和文） 障害をもつ高齢者の「学習」支援に関する実証的研究

研究課題名（英文） A research study on supporting learning of the elderly with disabilities

研究代表者 藤原 瑞穂（FUJIWARA MIZUHO）

神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・准教授

研究者番号：90269853

研究成果の概要：障害をもつ高齢者の学習支援の方法を探るため、発症・受傷直後に在宅で生活を送る高齢者、介護老人保健施設入所者、高齢者放送大学受講者を対象に学習ならびに支援の状況を調査した。その結果、障害をもつ自身に向き合い、折り合いをつけながら生活を再構築していくプロセスに学習の要素は多く盛り込まれていた。高齢者は、自身の可能性ならびに将来の展望を切り開いていくことを模索していた。そのためには支援者による評価とそれに基づく学習支援が不可欠であった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	690,000	4,290,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：高齢者，学習，障害

1. 研究開始当初の背景

(1) 人生の完成期である高齢期に何らかの障害をもったとき、個々の生活を再建していくことは当事者にとってもまた社会にとっても重要な課題の一つである。医療や福祉の領域からのアプローチが積極的に行われている一方、この再建のプロセスに高齢者の「学習」活動がどのように関わっているかについて検討されたものは多くない。

(2) 障害をもつ高齢者には高い学習ニーズがあること、またその学習支援に関しては、極めて個別的な対応が必要であることが、これまでの研究結果から予想されている。

2. 研究の目的

本研究はこれまで実施してきた関連研究の成果を基盤に、障害をもつ高齢者の「学習」

支援のための実証研究を行うことを目的としている。

具体的には障害をもつ高齢者を、3つの層すなわち受症・発症後間もない時期、自宅・施設で生活を送っている時期、積極的に学習活動を送っている時期に区分して選出し、学習支援のための介入の状況を、個々人ならびに個人が所属する該当集団中心に調査を行う。得られたデータをもとに、生涯教育論やリハビリテーションの概念を照らし合わせながら、具体的な支援の方法について考察する。

3. 研究の方法

(1) 障害をもつ高齢者の支援の調査

全国5ヶ所の高齢障害者の学習支援の場を訪問調査し、その支援を整理する。

(2) 実証研究

申請者が所属している機関の倫理委員会に計画書を提出し、承認を得た後に実施する。

サンプリング

次の3つの層にある関係機関に研究協力を依頼し、条件を満たす障害をもつ高齢者を紹介もらう。

a. 発症・受傷直後の高齢者：脳血管障害、切断などの発症・受傷により入院し、自宅に退院した者（発症・受傷後2年以内）。病院または訪問リハビリテーション。

b. 発症・受傷から数年が経過し、自宅もしくは施設で生活を送っている高齢者。介護老人保健施設

c. 積極的に学習を送っている高齢者。公民館などで活動する団体・サークル、高齢者大学など

(条件)

- ・60才以上
- ・改訂版長谷川式簡易痴呆スケールで18点以上（非痴呆）
- ・学習へのニーズがあり、学習活動の遂行に困難を感じている
- ・研究への参加に関して同意の得られた者

方法

対象者ならびに支援者へのインタビューならびにフィールドワークによって介入支援の実際を調査する。作業歴、発症・受症時の状況と現在までの生活歴、放送大学や自宅等での学習状況とその意味、困難さとその介入・支援について記述する。

4. 研究成果

おもな研究成果は次のとおりである。

(1) 障害をもつ高齢者の支援の調査

公民館や、高齢者大学などの生涯学習施設を積極的に利用している者は多くないが、在宅で学ぶことができる高齢者放送大学を受講している者があった。一方、医療福祉施設、作業所等では、生活の再建と社会とのつながりを築くための支援が行われていた。

(2) 実証的研究

60～80歳代の障害をもつ高齢者8名ならびにその支援者を対象に、学習ならびにその支援について事例研究を行った。

内訳は、自宅を訪問リハビリテーションを利用しながら生活をおくっている高齢者1名Aならびに癌末期にある高齢者1名B、介護老人保健施設に入所している高齢者1名C、高齢者放送大学（以下放送大学）を聴講している5名ならびにその学習支援者である。

以下、概要を示す。

妻と長年二人暮らしを営んでいたA(男性)は脳血管障害による片麻痺を発症し、それをきっかけに住み慣れた土地を離れ、息子夫婦と同居することになる。見知らぬ地域での生活は、老夫婦にとって適応が難しく、とくに妻は嫁への気遣いに疲れ果て、家事には手出しをしないことを決心し、役割喪失の状況に陥る。Aは、息子夫婦との同居生活に将来の展望が見いだせず、とくに自分が先立った後の妻の生活を心配していた。そのとき利用していた訪問リハビリテーションで、夫婦の置かれた状況を支援者(作業療法士)に相談する。支援者は、Aの機能評価の結果と今後の可能性を伝えながらニーズを探る。Aは、リスクを承知で再び妻との二人暮らしを始めしていくことを決意し、生活再建のために必要な自身の技能を再獲得するための取り組みを支援者と共に行う。その結果、半年後に住み慣れた元の土地で、妻との生活を始めることとなる。

末期癌のBは、これまでの人生がそうであったように、最後まで物事に挑戦し続け、前向きでありたいと希望していた。Bは妻に誘われて、週2回の訪問リハビリテーションを利用する。訪問リハビリテーションでは、支援者(作業療法士)が、Bのニーズを聞きながら注意深く「できること」を探していった。はじめは寝たきりに近い状況であったが、座位の耐久性が向上し、台所に立って、働く妻や孫におやつをつくることのできるまでになった。その後、次第に状況は悪化していったが、Bは作業療法士による訪問を心待ちに

し、「自分にはまだできることがある」と生きている実感を最後まで持ち続けていた。

長年一人暮らしを営んできたC(女性)は脳血管障害の発症をきっかけに息子夫婦と同居していた。外出先で転倒し、大腿骨頸部を骨折して入院。再び息子夫婦宅で生活を送ることを目標に介護老人保健施設に入所している。将来的に自立歩行は困難であったが、嫁の世話にはなりたくないというCの強い希望から少なくともトイレ動作が自立することが自宅復帰の条件となっていた。自宅に戻った後は、ほとんどの時間をベッド上もしくは自分の居室で過ごすことになるCにとって、トイレに自分で行くこと以外に、自分らしさを維持するための作業が必要であった。支援者(作業療法士)は、Cと一緒に自宅でできる作業を探した。以前行っていた携帯電話でメールする、友達に手紙を書く、絵を描く、本を読むことは今後もCが希望するものであり、「大学に行きたかった」という夢も持っていた。これらの作業は、Hが一人で完結することはできない。可能にするための環境(人的、物理的)への介入が必要であり、現在模索中である。

スモン病を発症してケアハウスで一人暮らしを営むD(女性)は歩行が困難であり、そのために日常生活に介助が必要であった。Dは電話や手紙を通じて、外部とのコミュニケーションを図っていた。Dにとって放送大学は、教授陣とのつながりを維持するための重要な場であった。教授陣は「身近な知恵袋」で、気軽に電話で「専門領域について議論できる相手」として位置づけられていた。

定年退職の翌月に放送大学を受講しはじめたE(男性)は、まもなく放送大学友の会の設立と運営を任されることになる。長年支社長として管理的な仕事を行ってきたEにとってこのような組織の運営はなじみのある作業であり、スムーズに退職後の生活に移行するきっかけとなっていた。脳血管障害による右片麻痺を発症した後は歩行や書字が困難となるが、月1度届く講義概要を楽しみに放送大学での学習を続けている。大学に所属し続けていることに誇りを感じ、近く大学より永年表彰されることを楽しみにしている。Eは週に1度デイケアに通っているが、そのプログラムは「学習」とは位置づけしていない。

一人暮らしの女性Fは、脳血管障害を発症後、「医師にもわかってもらえない」自身の動きづらさと痛み、そして暮らしの心細さを放送大学のテキストに投稿したところ、直ちに「見ず知らずの友達」から多くの励ましの

手紙を受け取る。Fは「一人ではない」ことを実感し、地方スクーリングで手紙を交換している「未だ見ぬ友達」に出会えるのを楽しみにしている。

G(女性)は、交通事故後に歩行の困難さと持続的な痛みを抱えている。放送大学や小学校のお話ボランティア、地域のサークル活動などで多くの人々とつながり、日々の生活を満たすことによって、その傷みをようやく手放していた。

F(女性)は放送大学ラジオ講座の内容は、娘を亡くした悲しみから立ち直るきっかけを与えてくれたと語り、ラジオ講座を聴きながら、自身の生き方を探り続けている。

(3) 研究成果のまとめと今後の課題

高齢者は、障害によってそれまで従事してきた活動やそれに伴う社会的なつながりが途絶えることがある。また、周りに迷惑をかけたくないという理由で新たな挑戦を回避することも少なくない。その一方で、自身は介護が必要な状況であり、生存(生活)のためのニーズを持ちながら、平衡して多くの学習ニーズをもっていた。

障害をもつ高齢者は、生活を再構築していくために学習を行っていた。

施設ならびに在宅で生活を送る障害をもつ高齢者は、学習集団に所属している自覚はなかった。しかし、障害のある自身と向き合い、それに折り合いをつけながら生活を再構築していくプロセスに学習の要素は多く盛り込まれていた。

痛みや不自由さを解き放つ手段のひとつとして、学習活動が位置づけられていた。

放送大学での学習活動は、人びとの交流を促す仕組みならびに“役割”が多く用意されていた。“役割”には“作業”が伴うが、それらには、障害をもつ高齢者にとってほどよい挑戦感があった。

高齢者は、放送大学の学習内容を人生の課題に組み込む作業を行っていた。

高齢者は、障害をもってなお自身の可能性ならびに将来の展望を切り開いていくことを模索していた。そのためには支援者による評価とそれに基づく支援が不可欠であった。

生涯教育領域と医療・保健・福祉領域のさらなる連携が求められる。

5. 主な発表論文等
(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

藤原瑞穂, 阿部和夫, 山内和江: パーキンソン病に対する作業療法. MB Medical Rehabilitation(査読なし)76:44-52, 2007.

Mizuho Fujiwara & Shigeo Hori: Learning Needs of the Elderly with Physical Disabilities and Elder College Attendees. Kobegakuin Journal of Rehabilitation(査読あり) 2(1): 35-47, 2007.

堀 薫夫・福嶋順: 高齢者の社会参加活動と生涯学習活動の関連に関する一考察. 大阪府老人大学修了者を事例として. 大阪教育大学紀要 教育科学(査読なし)56(1):101-112, 2007.

堀 薫夫: ポール・バルテスの生涯発達論. 大阪教育大学紀要 教育科学(査読なし) 第58(1), 2009. 印刷中.

[学会発表](計1件)

堀 薫夫「Paul Baltes の生涯発達論」日本社会教育学会第55回大会 2008年9月20日, 和歌山大学教育学部.

[図書](計4件)

堀 薫夫「高齢者の社会参加と外的な発達資産」立田慶裕・岩槻知也編『家庭・学校・社会で育む発達資産: 新しい視点の生涯学習論』北大路書房, pp.135-145, 2007.

藤原瑞穂 「生活課題」村田和香編『作業治療学4・老年期』協同医書出版, pp.37-43, 2008.

藤原瑞穂 「健康な高齢者」村田和香編『作業治療学4・老年期』協同医書出版, pp.138-146, 2008.

堀 薫夫「高齢者の学習と支援」小池源吾・手打明敏編『生涯学習社会の構図』福村出版, pp.57-71, 2009.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤原 瑞穂 (FUJIWARA MIZUHO)
神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・准教授
研究者番号: 90269853

(2) 研究分担者

堀 薫夫 (HORI SHIGEO)
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 60173613
研究分担期間: 平成18年~20年

大瀧 誠 (OHTAKI MAKOTO)
神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・助手
研究者番号: 20441199
研究分担期間: 平成18年~19年

梶田 博之 (KAJITA HIROYUKI)
神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・助手
研究者番号: 00441197
研究分担期間: 平成18年~19年

(4) 連携研究者
なし